

別記様式（第5条関係）

会 議 録

会議の名称		第2回 福津市こどもの国推進協議会
開催日時		令和6年10月8日（火）午後7時00分～午後9時50分まで
開催場所		福津市役所 別館1階 大ホールABC
委員名		(1)出席委員 安德尊博 永渕美香子 奥村賢一 笠置千晶 高木陽一郎 阿部泰治 宮木裕子 西田明日香 大石くみ 福永健司 (2)欠席委員 なし
所管課職員職氏名		こども家庭部 部長 中村雅美 教育部 学校教育課長 石井啓雅 子育て世代包括支援課 課長 羽田野美奈 こども課 課長 仲野浩章 児童センター長 花田清衣 子育て支援係 係長 甲斐小百合 こどもの国推進係 係長 竹田陽平 こども計画策定支援受注業者 株式会社ぎょうせい
会 議	議 題 (内 容)	1 開会あいさつ 2 部長あいさつ 3 協議会の運営方法について (1)会議公開・非公開について（公開、非公開の可否） (2)会議録の作成について（記録方法、確認方法） 4 協議事項 (1)福津市子育て支援に関するアンケート調査報告書について (2)その他 【アンケート調査等の進捗状況の報告】 ①福津市子ども・若者育成支援に関する調査について ②「福津市こども計画」策定に係る団体・機関調査について ③第2期福津市子ども・子育て支援事業計画に関する検証調査 及び福津市こども計画（第3期子ども・子育て支援事業計画） に関する量の見込み調査について
	公開・非公開 の別	☒ 公開 ☐ 非公開 ☐ 一部公開
	非公開の理由	
	傍聴者の数	4人

	資料の名称	資料 1 福津市子育て支援に関するアンケート調査報告書 資料 2 市民調査票資料 資料 3 団体機関調査票.
--	-------	--

会議録の作成方針	☐ 録音テープを使用した全文記録
	☒ 録音テープを使用した要点記録
	☐ 要点記録
	記録内容の確認方法 会長による確認
その他の必要事項	

審議内容 （発言者、発言内容、審議経過、結論等）

1 開会あいさつ

2 部長あいさつ

あいさつ後、前回欠席者（奥村委員、高木委員）への委嘱状の受け渡しと自己紹介。

会長：次第3「協議会の運営方法」について、事務局説明をお願いします。

事務局：(1)会議の公開・非公開について、公開とさせていただきたいと思いますがいかがでしょうか。

また、それに伴い、本会議の傍聴希望者の入出許可をいただきたいと思いますがいかがでしょうか。

本日の傍聴希望者は4名です。

(2)会議録の作成について、ICレコーダーによる要点記録で会議録を作成し、内容を市ホームページにて公開したいと考えていますがいかがでしょうか。

会長：委員の皆様には異議がないようなので、会議は公開、会議録は要点記録とします。

次第4「協議事項」について、事務局から説明をお願いします。

（1）福津市子育て支援に関するアンケート調査報告書について

内容を事務局が説明。

安徳会長：第1編 子ども・子育て支援ニーズ調査についてご意見はありますか。

永渕副会長：6ページの「5歳児の小学校低学年時における放課後の過ごし方の意向」というところで「学童保育所で過ごす」という項目が50%を超えています。また「習い事に行く」という項目も50%近い数字になっています。保育現場の話しを聞くと、保育児も既に習い事に行っているケースがあります。こどもたちにとっては、幼稚園、保育園、小学校という場面、学童保育や習い事の教室のような異なる場面が1日の中にあり、そのことで疲れている子こどもたちがいるということも耳にします。そうしたこども達の現状をどういう風にケアしていけるのかが気になります。

奥村委員：9ページの「重要度の高い子育て支援策について上位7項目」というところで、「いじめ、不登校、児童虐待の防止と対応」という項目がありますが、これは、福祉的課題と教育的課題が混在しているという気がします。これをまとめて聞くのは難しいとおもうのですが、これはどういう形で質問を行ったのでしょうか。

事務局：この項目については、記載のとおり質問を行っています。ご指摘のとおり、福祉、教育に跨る項目であると思います。前回のアンケートでも同様の聞き方をしているためそのままの形で質問しております。

奥村委員：7ページの「隣近所との日頃のつきあい」というところで、「道で会えばあいさつをする」という項目が前回の47.6%から34.5%に減って、「ほとんどつきあわない」が8.4%から11.5%に、「無回答」が0%から18.6%に増加しています。転入者の増加、高齢化等の影響かなと思いますが、とくに、新しく住民になった人たちとの付き合い方を検討していく必要があるかもしれません。

永渕副会長：11ページの「子育てに関する悩みと相談先」で相談先が「保育所・幼稚園・学校の先生」に相談をするという回答が19.7%と低かったことが気になります。先生に相談することが、保護者にとって敷居が高いのかなと感じました。

安徳会長：他にご意見はありますか。

高木委員：本アンケートから読み取れる市の状況や、それに向けて市が今後どうしていくのか、何か内容を総括したものがあれば、教えていただきたいと思います。

事務局：今回の報告では、それぞれのアンケート調査の結果を集計した内容報告にとどまらせていただいております。今後の計画策定にあたりましては、この結果内容を踏まえて検討していきたいと考えております。

高木委員：総括的なものがあれば、この場で協議する際に、協議しやすいのではないかと思います。限られた時間のなかで有意義な協議をしていくために、そうしたものがあれば良いと思います。ご検討をお願いします。

西田委員：71ページの「満足度の高い子育て支援策」についての回答で、「無回答」が約30%と高くなっているのが気になります。アンケートの自由回答の方では、こういうことが必要、あったら良いという意見がありますので、このアンケートで得られた貴重な意見を、今後の計画はもちろんですが、現在の施策にも活かせれば市民は喜ぶのではないかと思います。

奥村委員：例えば、23ページの就学前の悩みで「子どものしつけや教育」が38.0%と高い値となっています。そうした保護者の内、「子どもの発育や発達」で悩んでいる人がどれくらいいるとかということを経集計していただくことは可能でしょうか。そうした処理を行うことで、どこをどう強化していけば良いのか見えてくることもあると思います。

事務局：本アンケートについて、委員の皆様から、こうしたものがあれば良いなということをお教えいただければ、アンケート結果で拾えるものについては、対応を考えたいと思います。

福永委員：ハード面の不足を感じます。また、第2編の方にはなりますが、一般的な世帯年収は600万円程度と言われており、このアンケートに回答してくれた人達も600万円から1,000万円未満の世帯が多いように思います。ただ、こういった中間層にある世帯は、生活には困らないけど、余裕があるわけではないというのが実情だと思います。国の制度や福津市の施策では、低所得者へのサービスが多いように感じます。もちろんそれは必要なことですが、そういったサービス

を受けられないような、中間層にある世帯が求めるサービスについて考えていくことも必要だと思います。

大石委員：経済的支援も大切だと思いますが、その他に、子どもが遊べる場所が欲しいという意見も聞きます。アンケートの結果からも、そのことが読み取れるのではないかと思います。

こどもの経験や教育にはお金をかけたいから仕事をする。そのために、時間的な余裕がなくなっている親御さんも多いと思います。経済的支援も良いのですが、地域の中で、子どもに様々な経験を積ませることができると良いと思います。人との繋がりで精神的な負担が減らせる、子どもが多く体験を積める、豊かな子育てができる、そんなことができれば良いと思います。そうした支援に関わる団体と共働できれば良いと思います。

宮木委員：キッカケラボに登録している団体の中には、子育てが大変だったという自分達の経験から、今、子育てをしている人達へのサポートがしたいという人達もいますので、そういった人達と連携することも大切だと思います。子育て世代の人達にとっては、学校や地域といった場所とは別に、悩みを共有したり、打ち明けたりできる居場所を持てることが大切だと思います。

また、先ほど高木委員から意見があったように、計画について今後の協議をしていくためにも、このアンケートの総括は欲しいと思います。

事務局：高木委員、宮木委員の意見は大変重要だと思っています。可能な限り対応したいと考えておりますので、その方向で作業を進めたいと思います。

笠置委員：子育て世代の若い親御さんを見ていて思うことは、自分達が褒められることもなく、癒されることもなく、ただ懸命に生活しているということです。そういった中で心に余裕を持てず、その影響はこどもにも及んでいると感じます。

福津市の施設や団体を利用すると、サポートがあり、助けてもらえることはたくさんあると思うのですが、そうした場所に行くことに抵抗を感じる親御さんもいるようです。福津市には素晴らしい施設、サービスがありますので、それをしっかりとお知らせして、安心して利用してもらえるようにしていくことが重要だと思います。

阿部委員：79ページの「大規模校問題の解消」というところですが、学校で相談を受ける場所を確保することも難しい現状があります。子どもとゆっくり話しができる場所の確保も合わせて考えていければと思います。

石井課長：大規模校への対策は必要だと考えています。即座に解決が難しい問題も多いですが、少しずつ問題解決をしていきたいと考えています。そして、大規模校のメリットを生かす方法の模索も必要だと思っています。

高木委員：112ページ等に子どもの意見として、「学校を増築してほしい」、「運動場を広くしてほしい」といったものがあります。また、145ページには保護者の意見として、「過大規模校の問題を早急に解決して欲しい」といったものがあります。大規模校のメリットもあるのですが、デメリットも非常に多くあります。現状のまま進むということが、こども達にどのような状況を与えていくのかをもっと議論する必要を感じています。福岡南小学校の生徒数は、福岡県で

は最多、九州でも最多の生徒数であり、全国的に見ても5本の指に入ります。そして、その生徒数は現在の設備に対して、ハード面の圧倒的な不足を生んでいるという現状があります。こういった中で、福津市の他小学校の生徒と同様の教育環境を提供できているのかということには疑問を持ちます。学校を預かる者としては、メリットに目を向けるよりもデメリットに目を向けて、問題の解消が急務だと考えています。生徒、職員、保護者が困っているということを知って欲しいと思います。

永渕副会長：勉強をする、知識を身につけることも非常に大切なことですが、同時に人間性、他人を思いやるとか、協力するといったことが土台になって豊かな人間が育つのではないかと思います。福津市の子どもが豊かな人間性を獲得できるための教育環境の整備は非常に大切なことだと思います。

安徳会長：第1編について、他にご意見はありますか。無いようですので、第2編 こどもの生活実態に関する調査についてご意見をお願いします。

高木委員：111ページの「地域の居場所を利用したことによる変化」について、「友だちが増えた」、「生活の中で楽しみが増えた」といった意見が多くなっています。やはり、こうした居場所を作るということは有効だと感じました。103ページの「こどもの困りごとや自己評価等について」ですが、「お金の面で助けて欲しい」、「自分がしているお世話の一部を誰かに代わってほしい」といった項目について、パーセンテージは少ないですが、こうした子どもがいるという事実をきちんと理解する必要があると感じました。

阿部委員：92ページのヤングケアラーについて、「あてはまる」が小学5年生（6.8%）、中学2年生（4.0%）ともに存在しています。どういった家族構成なのか、どういったことをしているこどもが「ある」と回答しているのかを知りたいと思います。学校でもそうしたことが分かれば、注意して生徒に接することができると思います。また、97ページ「勉強のことや将来の進学先について」では、「自分で勉強する」が80%と高い数字を示しています。こども達が自主的に勉強できる場所の確保も今後、考えていくべき課題かもしれません。

奥村委員：ヤングケアラーについて、この概念はイギリスから入ってきたものですが、日本では、少し拡大解釈をしていると思われる節があります。元々、ヤングケアラーとは、家族に病人、障害がある人がいる場合、そうした人の介護をしている子どもをヤングケアラーとしていました。しかし、日本では、例えば、ひとり親世帯で兄弟の面倒を見るといったケースもケアラーとして捉えています。イギリスのように配慮が必要な人、介護が必要な人がいる場合と家庭基盤の問題で家事をするといったケースを同一線上で考えるのは、こどもたちが抱える本質的な課題を曇らせてしまう可能性があると考えています。本来は大人がやるべきこと、大人じゃなければ難しいと思われることを子どもが担っている場合をヤングケアラー問題と言うわけで、ゴミ出しをするといった子どもでもできるお手伝いまでも問題としてしまうと話がそれていってしまいます。ヤングケアラーの問題に関してはもう少し丁寧に取り扱う必要があると思います。

永渕副会長：96 ページで「学校生活等で起きていることや過ごし方」というところで、「学校では一人で過ごすことが多い」という回答が、小学5年生で5.1%、中学2年生で4.5%となっています。一人で過ごすことが悪いことではありませんが、常に集団の中にいて、一人で過ごしているということであれば、孤独を感じているのではないかと思います。学校の先生方も気を配っているのではないかと推察しますが、孤独を感じるということは、苦しいのではないかと思います。大学生で保育・教育者への道を希望している学生の中には、かつて自分がそうした経験をして、それに気づいてあげたいという学生もいます。孤独を感じている生徒に対してしっかりとケアが必要という気がします。

あと、100 ページの「わからないことがあるようになった時期」で小学5年生の回答では、「小学校3・4年生」が53.2%と高い数字を示しています。自分の経験からも3・4年生から勉強が難しくなった記憶があるのですが、3・4年生から勉強は難しくなるのでしょうか。

高木委員：小学4年生になると抽象的思考が入ってきて、学習の壁があると言われます。そうした生徒に対応するために、少人数指導といった取り組みも行われています。

永渕副会長：その壁に対する対応、少人数指導といった取り組みは学校単位で行われているのでしょうか。

高木委員：学校単位で対応を行っています。しかし、教室が足りないために少人数指導の取り組みが行えない学校もあります。

永渕副会長：ありがとうございます。あと、103 ページですが、「学校や周りの大人に助けて欲しいこと」というところで、「勉強を教えて欲しい」という回答が約15%となっています。勉強が分からなくなったということで学校がつまらなくなり、登校拒否といったケースもあるのではないかと思います。学校としての取り組みは何かありますか。

高木委員：先ほどの少人数指導や修学度別指導といった取り組みを実施しています。ご指摘のように、勉強が分からなくなって学校が楽しくなくなるというケースは多いと思います。学校としては、勉強が楽しい、学校が楽しいと思えるような取り組みを今後も模索し、実施していきたいと考えています。

福永委員：148 ページの「仲学2年生・・・」は誤字だと思います。それと、144 ページの「子どもの貧困を解決するために必要な支援」という項目で、「こども食堂などの居場所や食事の提供」という回答が約34%あります。私が勤める大学でも、地域との繋がり、学生が経験を積むという意味合いでこども食堂に参加しています。福津市は大学等と協力して何か取り組んでいることはありますか。

羽田野課長：こども施策に関して、大学等と連携して実施している取り組みはありますが、こども食堂に関する取り組みは今のところありません。

福永委員：大学としても自治体との協力体制を構築し、共働でさまざまなことに取り組みを行っていくことは、地域貢献、生徒の学習機会の拡大につながると思いますので、大学等との協力体制の強化を図っていくことも大事だと思います。

安徳会長：福津市が行う事業のメンバーとして大学の学生等が参加すれば、より人的な層に厚みが生じることになるのではないかと思います。今後も大学、専門学校等の教育機関との連携は重要だと思います。

永渕副会長：地域と大学の連携ということで、学生に対して、活動趣旨、研究趣旨を丁寧に説明し、理解を求めることが参加に繋がると思います。先日、大学1年生に活動趣旨を説明し、ボランティアでの参加を募集したところ、多くの応募がありました。学生が活動内容を魅力的と判断した場合、人は集まると感じます。

宮木委員：キッカケラボでは、1日体験プログラムというものを用意しています。学生が何かをやってみたいけれども何をやれば良いのか分からない等の場合、1日でいろいろな体験をしてもらえるようなプログラムも実施しています。今後も、学生が参加してみたいと思うようなプログラムの作成をしていきたいと思っています。

西田委員：地域コーディネーターという立場から、教育現場のハード面、経済面等さまざまな側面から、こどもも、保護者も、先生も、それぞれの立場でそれぞれの課題を抱えているのではないかと考えています。中学1年生の中には、小学生時代の学習の躓きを引きずっているケースも多くあります。学生が勉強をする場所がないという意見も聞きますので、市の施設等を夜間開放して学習の場所を確保するといった対策を検討してみることも必要ではないかと思います。勉強を頑張りたいと思っている生徒に対して、どういう支援ができるのか考えていきたいと思っています。

笠置委員：市、各団体等は、いろいろな取り組みを実施していますが、その情報が行き届いていないと感ずることがあります。情報をより綿密に発信していくということも重要だと思います。

大石委員：こどもがどういう風に情報を得ているのかということが気になります。

事務局：市としては、ホームページ、広報誌、自治会の回覧板等で、情報発信をしていますが、より伝わりやすい方法を模索しながら取り組んでいきたいと思っています。

大石委員：今後も情報発信をお願いしたいと思っています。

安徳会長：では（２）その他について事務局から説明をお願いします。

（１）その他

事務局から説明。

安徳会長：何かご意見・ご質問はありますか。無ければこれで会議を終了したいと思います。本日は活発な議論やご意見をいただきありがとうございました。

事務局：本日は貴重なご意見をいただきまして、ありがとうございました。
以上を持ちまして、第二回こどもの国推進協議会を終了させていただきます。